

第2回分科会活動報告

日 時：2012年 6月21日（木）

場 所：帝京大学 宇都宮キャンパス

出席者：43名

記録者：平石 泰介（東海大学）

1. 配付資料

- 1) 2012年度第2回第二分科会プログラム
- 2) 2012年度第2回第二分科会出欠名簿
- 3) 帝京大学 事例紹介資料
- 4) アンケート集計結果

2. 研究活動内容

1) 全体会 13時00分～13時10分

- (1) 運営委員長より開催挨拶
- (2) 帝京大学理工学部長増井様より会場校ご挨拶
- (3) 幹事より連絡
- (4) メディア・コミュニケーション局運営委員より連絡

2) 事例紹介「LMSを有効活用するための学生を巻き込んだ支援体制」

13時10分～14時25分

帝京大学 ラーニングテクノロジー開発室 室長 渡辺氏

帝京大学は板橋・八王子・宇都宮・霞ヶ関の各キャンパスと福岡医療技術学部を有しており、会場となる宇都宮キャンパスは約2,000名の学生が在籍し、理工・医療技術・経済学部を設置している。

宇都宮キャンパスの教育学習関連情報システムは、独立したサブシステムをシングルサインオン環境で使用できる構図になっており、入口となるポータルが未整備であることが今後の課題である。LMSはBlackboard社の「Blackboard Learn R9.1」を採用している。



LMS導入は2001年に遡り、トライアルによりその有効性に手応えを得たため、2002年にWebCT社の「WebCT CE4」を理工学部に導入した。導入後の組織的支援の必要性から、2003年にラーニングテクノロジー（LT）開発室が発足し、支援体制を構築した。その後、2006年に「WebCT(BbLS)CE6」を全学的に導入し、2011年Blackboard社の「Blackboard Learn R9.1」へ移行した。

LMSを活用している科目は2003年度32科目だったのに対し、段階的に採用科目が増えていったことで、2011年度は336科目にのぼっている。理工学部が設置されている宇都宮キャンパスだけでなく、八王子キャンパスでも利用が増えており、各キャンパスでも宇都宮キャンパスと同様の支援体制構築が求められている現状である。

L T開発室では、授業改善のためのL T開発や授業の電子化およびインターネット授業の支援、L Tによる授業改善の普及活動、L Tに関する調査・研究を業務内容としている。その中で、教材開発や授業支援、L T開発室業務支援などを業務内容とするL T開発アシスタント(L T A)制度を採用し、学生補助員をL T Aとして有給で雇用している。2011年度はL T Aに32名の学生が登録し、中には大学院生も2名含まれている。授業時間内に行う授業運営支援の他に、成績評価に直結しない範囲で課題の下評価・集計を行う授業時間外に行う授業運営支援をしており、L T開発室の補助員として活発に機能している。

2011年度はLMSシステムの更新(WebCTからBlackboardへ)が大きな業務となり、コースコンテンツをL T開発室で移行し、担当教員に納品している。移行作業は、前年度前期授業分を後期授業期間内にコピーし、後期授業分は前期授業期間内にコピーするというスケジュールで進め、マイグレーションツールによるコピーを行った後、チェックリストを用いながらL T Aと職員によるダブルチェックを行い、担当教員に納品という流れで行った。LMSを他社製品に変える際には、このようなフローになるのではないかと考えている。

L T A制度ではL T A指導のため労力が必要となるが、学生を巻き込むメリットとして、LMS活用支援のための労力を確保することができる。また、教員と学生との間に中間的な存在としてL T Aを置くことで、多様化している学生に対してのサポートを可能にし、L T Aが周りの学生に良い影響を広めることができている。

L T Aの活動について、現在は日誌を書き溜めている状態だが、今後の取り組みとしてL T Aのeポートフォリオを導入することを考えている。eポートフォリオの導入に際し、L T Aの目標を整理してルーブリックを制定する予定だが、L T Aの成長を視覚化することで成長を促進させることを狙いとしている。目標を意識して業務遂行することや振り返りを徹底させていくこと、L T A間コミュニケーションの促進につなげていきたいと考えている。

※学生L T Aより事例紹介

(1) 鈴木満里奈さん(理工学研究科 2年次生)

2009年度から活動し、併せてT Aも行っている。主な業務は、学生が躓いている点を指摘し、それを教員へ報告する課題評価や、課題の作成などである。課題の評価と作成を行っていることで、学生への的確なサポートができていると実感している。

教員としての立場ではなくL T Aはあくまでも補助員の立場であるが、学生に対して教えることで自らの理解も深まるとともに、業務に対して大きな責任感を感じる反面、責任を問われることに対するプレッシャーも感じている。また、L T A同士の交流も広がることもメリットと感じている。

(2) 藤沼和馬さん(理工学部ヒューマン情報システム学科 4年次生)

2009年度から活動している。主な業務は、T A向けのマニュアル作成や課題の集計に役立つエクセルマクロなどの作成、ビデオ制作などである。

ビデオ制作については、授業内でプロジェクタ画面が見づらいという学生からの意見に対して、自身が所属しているクラブ活動の経験も活かし、説明スライドを挿入して分かり易い授業VTRを作成し、LMSへアップしている。

大学教育の現場を肌で感じることができており、とても良い経験になっていると実感している。また、LTAとしての業務時間外に、教員からのLMSに対する質問に答える場面もあり、教員からLTAに対するニーズも高いと感じている。

3) 討議「LMSの有効活用に必要な支援内容と支援体制」(ワールドカフェ形式)

14時40分～16時00分

座長：中村(亜細亜大学)・須藤(関東学院大学)

- (1) 座長よりワールドカフェ実施方法説明
- (2) 各グループの討議記録(テーブルホストからの内容報告)

①白石(千葉工業大学)

・教職員等ユーザーコミュニティの形成

現状のシステムでは科目ごとや担当者ごとにデータが区切られている物が多いが、教員間でコンテンツなどが共有できる仕組みが可能であれば利用活性化に繋がると考えられる。

また、「教員」⇔「学生」のコミュニティだけでなく「教員」⇔「教員」のコミュニティを形成することで他教員からの意見を得られることから教員にとっても新たな発見があり、LMSの活性化だけでなく授業改善に繋がる可能性も考えられる。

・問い合わせ先の明確化

特に学生からの問い合わせについては、成績等に関わるシビアな質問が想定されるための確かつ慎重な対応が要求される。現状では教務系や情報系の部署が兼担してサポートを行っている大学が多いと思われるが、窓口の明確化という意味でも今回会場校となった帝京大学様のようにサポートを主とする部門の設置が理想的な体系かと思われる

・事例やサンプル(コンテンツ・利用方法)の紹介

新規に利用教員を獲得することを考える場合、LMSがどのように利用できるのか具体例を提示することが最も解りやすい。また、既に利用をしている教員についても他教員の利用例を見ることで新たな気づきに繋がる可能性があり、結果的にLMSの活性化に繋がると考えられる。

但し、一気に利用率が向上するとは考えにくいので、広報誌等を利用した長いスパンでの周知が必要と考えられる。また、事例紹介などに協力してくれる教員の獲得なども必要。

・所見

内容としてはまず「有効活用」がクオリティの向上と利用率の向上のどちらを定義とするのかという討議から始まり、結果としてクオリティの向上を目的にLMSの中身(シ



システム・コンテンツ等) についてと利用率の向上を目的に教員への周知方法等についての討議を主として行った。

今年度2回目となるワールドカフェ方式での討議だが、各テーブル共に参加者が積極的な意見を発しており今後もこの手法で討議を行っていければ非常に有用だと感じた。

②杉本（東海大学）

・周知

LMS利用の現状として、教員がLMSを有効に活用できていないのではないかとという意見が挙げられた。これを改善するには教員への周知をさらに充実させる必要があり、それによりLMS利用率の向上にもつなげることができると考えた。周知方法は、パンフレット・HP・マニュアルの作成、講習会の開催、相談コーナーの設置などが挙げられた。

・良いサンプル

周知方法の延長として挙げられたのがサンプルの利用である。利用の雛形となるサンプルがあれば、教員がLMSの利用を検討する際の有効な判断材料になり、また用途に応じて様々な応用が可能である。ただサンプルの導入には、著作権などの問題点もある。

・基盤となる体制

支援体制として、以上に述べた点を総括したような基盤となる体制を確立することが重要である。ご講演でもあったように学生も取り込んだLMS支援や教員同士、学生同士のつながりを密にするための取組みなど、画期的な方策が求められる。

・所見

LMSを有効活用するためには、システム面と広報面による充実が重要である。前者については職員間で勉強会を行うなどして理解度向上に努め、さらなる利便性を追求し、後者については柔軟な発想と幅広い視野を持って、積極的に企画・立案すべきである。また、LMSに限ったことではないが、職員・教員・学生同士、また、職員・教員・学生間の相互のコミュニケーションは重要であり、LMSを通じてこれらを強化できるような方向に持っていかればいいのではないかと感じた。

③中島（関東学院大学）

・連絡方法の確立

まず先生への連絡方法が確立していないと、LMSの概念やメリット、講習会等の情報を伝えることもできない。メールを読まない先生も少なくないので、掲示や紙面での配布などの方法で補完する必要がある。

しかし紙使用量の増加に抵抗があるという声もあり、連絡方法の確立は大きな課題である。

・先生のやりたいことを把握する

LMSには資料の掲載やレポートの回収をはじめ様々な機能が実装されており、先生の需要も多様である。先生の目的をはっきりと把握していれば、サポートする側も目的達成のために最適な手段を提示できる。

・部署・システム間の連携

部署によっては必ずしもLMSが重要視されているわけではない。そのため様々なシステムへのリンクが集まるホームページやポータルからLMSへの移動方法がわかりづらくなっているという声があった。

- ・所見

他システムとの機能競合や、LMSを利用することによるメリットの周知など、利用率向上を意識した意見が多く挙がっており、多くの大学で課題となっているように感じた。

ワールドカフェ形式では固定メンバーによるグループ討議よりも、短時間で多くの大学の方と意見を交わすことができ、とても勉強になる。

④濱田（学校法人日本体育大学）

- ・コミュニケーションツール

LMSにおける有効活用の一つに利用者間のコミュニケーションアイテムとして活用できる面があり、授業の中だけにとらわれず大学内外でも有意義に利用することにより学生のキャンパスライフを充実したものに発展させられる可能性がある。

これは運用方法・体制によっては利用側も運営側も双方に考えられる。

- ・労力をいつ・どのようにかけるか

LMSを導入し、活発かつ発展的に活用していけるかは、運営側の発想と配慮にかかっていると思われる。

ここでいう「労力」とは単に人員確保や運営作業のみを述べるのではなく、運営支援内容の策定における時間を導入時に掛けそれを運営サイクルとして行っていくのか、また導入時は業者などを活用し効率的に支援内容を確定し運営サイクルに労力を費やすのか、それぞれの考え方がるように思える。

- ・体制のバランス

大学内における「教員」「学生」「職員」の大きな括りをLMSの利用・発展において運営体制のバランスとして位置づけることが大切なように思える。

それぞれがその立ち位置のみでLMSを導入・運営していくのは結果、活用促進を妨げる恐れがあるように感じた。

- ・所見

今回、ワールドカフェ方式でLMSの導入大学などの話を聞く限り、導入を決定する際の問題点についてはさほど聞かれず、導入前も含め導入後の運営・支援・体制を懸念する考えや問題点に直面している部分の話に集中したように感じた。

LMSの導入に積極的に携わった一部の人員や組織だけでなく、大学全体としてLMSの活用・支援・体制について積極的に議論し総理解を深め、組織全体に浸透させ、大学サービスに直結する活用方法の模索が必要なように思えた。

⑤白川（立正大学）

- ・中立的なコーディネーター

単にLMSを導入しても有効活用はできないので、LMSと教員とを繋ぐコーディネーターが必要である。LMSに興味を持っていない教員に対して、教育効果や利便性を

提案することでできれば、利用率向上にも繋がるのではないか。導入のみの「待ち」ではなく、「提案」していくことが大切である。

- ・メリットの周知

LMSを授業に導入する際、設定が面倒だとか、準備が大変だといったデメリットの面は強調されやすいが、その先にある教員・学生のメリットについてはあまり論じられない。メリットをいかに教員に周知するかは、当たり前のことではあるが大切である。

- ・コンテンツの共有化

実際にLMSを利用するとき、各教員間で使用しているコンテンツを共有化できる環境があれば、新しい発見もあり、より効果的にLMSを利用できる。但し、自分の授業を他教員に見せたくないといった意見はあるので、手法は考える必要がある。

- ・所見

内容としては、「LMSをどうすれば教員に利用してもらえるのか。」というスタートラインに立たせるかという議論が多かったように思われる。導入したことは良いが利用率が上がらず、よって費用対効果も良くないといった悪循環があるのではと感じた。

ワールドカフェ形式の討議を2回実施し、参加者全員で意見を交わしている感じがして良い傾向だと思う。

⑥平石（東海大学）

- ・メリットの周知

教員側から見たLMSのメリットは、授業内だけでなく授業外でも学習させることができる有用な学習コンテンツである。また、学生側からは、内向的な気質の学生が増えてきている現状に鑑み、教員とのコミュニケーションツールとしてLMSを利用できるという点が挙げられる。

これらのメリットを広く理解させることがLMSの利用度を向上させることにつながり、利用を促進する環境を作ることにつながる。

- ・窓口

LMSの運用に欠かせないことは、サポート役であり問い合わせ先ともなる明確な窓口の設置である。現状の問題点として、教務課などがこれを請け負うと、どうしてもLMSに対する支援が片手間になりがちになる。

しかし、これ自体を業務委託して「ラーニングコンシェルジュ」という部門を設置することや、事例紹介のあった帝京大学様のようにLMSを具体的にサポートする部署を設置など、支援の基盤を作ることは非常に有効である。

- ・教職「学」協働

窓口を明確に設置しても、それが問題に対する単なるヘルプデスク的な役割に終わってしまえば、LMSの利用促進や、より有効な運用支援を実現することができないと考えられる。

教職協働での取り組みを推進する動きはどの大学も見受けられるが、そこに学生も巻き込んだ帝京大学様の事例を受けて、中間的な立場でLMSに対して考えることができるLTA制度などの取り組みは非常に有効であり、理想的な体制の一例である。

・所見

LMSは文系と理工系学部で利用率に差があることや、教員によって利用に対するモチベーションも温度差がある。有効活用のためには、支援型とプッシュアップ型双方の取り組みが必要であると感じるとともに、兼務ではない明確な窓口を設置することで、充実した支援の提供ならびに支援体制の確立が実現できると感じた。

今回もワールドカフェ形式の討議となったが、活発に発言していただいたメンバー各位に感謝したい。また、各大学の現状紹介に留まらず、柔軟なアイデアを発し易いこのワールドカフェ形式の討議は、非常に有効であると感じており、今後も積極的に討議に取り組みたいと感じている。

4) 施設紹介と見学（オートモビル・テクノロジー・センター、格納庫）

16時00分～17時00分



以 上